

西日本豪雨 医療支援

避難所で検診、指導

西日本豪雨を受け、八王子市散田町の「南多摩病院」医療支援チームが、9日から岡山県の被災地で活動を始めた。同病院のチームは医師、看護師、救急救命士2人の計4人。全国の私立病院でつくる全日本病院協会の「災害時医療支援活動班（AMAT）」として出動した。

【黒川将光】

チームを率いる医師に目的地に着いた。朽方規喜さん(55) 同小学校は避難所になると、4人は8日午後、病院の救急車で八王子を出発。岡山の病院の指示で、倉敷市の市立岡田小学校を目標とした。4人は大阪で1泊し、9日正午過ぎ

に目的地に着いた。同小学校は避難所になっており、一時200人が体育館と教室で身を寄せた。チームは9日、高齢者を中心約50人を検診。過労がうかがえた1人を岡山市内の病院に搬送し

八王子のチーム岡山に



たという。10日も避難した人たちを検診した。チームは1週間

避難所になっている岡山県倉敷市立岡田小に到着した南多摩病院の救急車一同病院医療支援チーム提供

程度、現地で活動する予定。

2年前の熊本地震でも現地で活動した朽方さんは、電話取材に「熊本地震の際は余震があったが、今回はその不安はないため、日中は自宅に戻り、夜間だけ避難所で過ごす人が多い」と話した。一方で「気温が高いので感染症が心配。岡田小だけでも車が100台近く止まっており、車内で過ごす人たちのエコノミークラス症候群を気遣う必要がある」と指摘。「今後は生活再建に向けて協力が得られる災害ボランティアが必要になる」と語った。